

住まいし新聞

大月風土記 民話の巻 井上 文次郎

日本ステンレス工業株式会社

発行/日本ステンレス工業株式会社

〒409-0617 山梨県大月市猿橋町殿上630-1

電話=0554-22-2500

FAX=0554-22-5234

1

月号

【ご挨拶】
明けましておめでとう御座います。
常日頃、スマイル新聞をご愛読賜り、心より感謝申し上げます。
早いもので、二〇〇〇年一月（平成十二年）より毎月一回発行してより十七年目を迎える事が出来ました。大月市民に、もっと大月の事を知つて頂こう、興味を持つて頂こうと大月市民のためにとの想いの中で、発行して参りました。これも偏に、執筆して頂いた各先生方のご尽力で有り、全てボランティアで執筆をお願いしてきました。誠に申し訳なく心より感謝申し上げる次第です。

その間、七巻の書籍を発刊し、各二〇〇〇部配布させて頂きました。

しかし、何分不慣れなため、誤字脱字や引用の問題など多々ご迷惑もお掛け致しました。

何卒、市民レベルでの善意ある行動の中であつたと、ご理解を賜れば幸いに存じ上ります。

今後とも、社業に励む傍ら、継続して参る覚悟ですので、皆様のご支援ご指導を宜しくお願ひ申し上げます。

日本ステンレス工業（株）代表取締役会長 石岡博実

お爺さんは木こりとお爺さんは木こりといつても、山にある木の根や株、鹿の角など面白い形をしたものや、珍しい形をしたものを磨いたり、切ったりして飾りものに造つて宿場の店に売るのが仕事でした。

正月も過ぎて、二月の午の日、お爺さんは「婆さんや、今日は久しぶりの良いお天気なので、これから雁ヶ腹へ登つてこよう、あそこへ行きやー、

鹿の角も抜けて、面しれない木や、珍しいものが見つかるべえ。」

お爺さんは、「うんだ！ うんだ！ 今日はお天気もいいし、そうしたら。早く速お弁当をこだくさん

お爺さんは、何時ものように背負子を背負つて、山へ出かけました。

一刻ほど登ると金山峠に着きました。山は静まりかえつていて、下を流れる谷のセセラギが聞こえてきます。

「滝子の天狗のお囃子（雁ヶ腹摺山夜話）」

昔々、金山という村に、木こりのお爺さんがいました。

お爺さんは、可愛い孫がいて、その名前を小太郎と云い、大層可がつていました。

お爺さんは木こりとお爺さんは木こりといつても、山の裾を巻くように、豊かな水が流れています。

この谷は葛野川の支流小俣川の上流なのです。

（ここでは川をせき止め魚を捕る漁場）と書いて木杭を見ながら飛び石

伝いに谷を越え、雁ヶ腹摺山の登り口に取り付けました。

爺さんは「百間干場」（ここでは川をせき止め魚を捕る漁場）と書いて木杭を見ながら飛び石

伝いに谷を越え、雁ヶ腹摺山の登り口に取り付けました。

この一帯はもう大きな針葉樹林も消え、白樺赤樺の原生林が続いていま

す。「やれやれ 天地の境か！ 南無阿弥陀仏・南無阿弥陀仏」爺さんは念佛唱えながら、そこで木の株に腰を下ろすと、婆

さんは弁当を食べてくれるお弁当を広げました。小鳥の声を聞きながら、爺さんは弁当を食べているうちに、仕事のことも忘れて山はええ、何時来ても本当にええ、どうせここまで来たので、ちよくら

爺さんは立ち上がりると山頂を目指して登り始めました。灌木の林が切れました。扇を逆さまにしたよ

うな感じで、茅が一面に広がって、なだらかな傾斜が頂上まで続いて、この辺の見晴らしの良いこと、富士山は目の前に聳え、遠くは相模の海や、武藏の国の山々が見え、

音がして、爺さんの後に何かが舞い降りました。ビックらして振り返ると、それは大きな天狗です。

爺さんは、辺の景色の美しさに見惚れてしまいまして。その雄大な眺めは

爺さんは、辺の景色の美しさに見惚れ

しかし 小太郎はこれ
がどんなことか解ろうは
ずはありません。爺さんは
は天狗の云いつけ通りに
誰にも話さずに亡くなつ
てしまつたのです。小太郎も、爺さんと同じよう
な仕事をして生計を立つ
ていましたから、何時も
山に行って、木の株や、
鹿の角など採取していました。
けれど 雁ヶ腹摺
山までは、奥深く、めつ
たには行くことはありま
せんでした。

ある日、小太郎は鹿の
角欲しさに、雁ヶ腹摺山
に行つて見たくなりました。

この日は、爺さんが山
に登つたあの二月の午の
日に当りました。

小太郎は二刻かけた頂
上に着きました。この頂
きは雁ヶ腹を摺ると云う
ほど高く、四方の山を一
望することが出来ました
ので、小太郎も久振りに
広々とした雄大な山の景
色に見惚れていきました。

すると 何処からか、
笛と太鼓の音が聞こえて
着ました。小太郎はその
音の聞こえて来る彼方に
目をやると、富士を背に
滝子の山が見えます。

あら不思議！その滝子
の山に、多勢の天狗が集
まって何やらしているの
です。小太郎はこの不思
議な光景を、息をのんで

見続けました。すると背後にバサつと大きな声がして、天狗が現れ、「小太郎そこで何をしている。」と、大声で怒鳴りました。小太郎はビックリして立ちすくみました。「いやいや、いい訳は聞かぬ。今度だけは許してやろう。今日見たこと、誰にも喋るでないぞ。若し喋つたらその口を裂いてくれるは。」「お助け　お助け。」「よし　よーし、解ったなら山をとつとと降りろ、命が助かりたいなら、鶏百羽、酒百樽じや」小太郎はほうぼうの態で山から逃げ帰りました。山から逃げ帰ると、余りに不思議な恐ろしい出来事を見て、暫く小太郎も爺さんのように恐怖のため腑抜けになってしましました。それから数年して何時しか、あの恐ろしい経験もだんだん薄らいで、忘れ、何事もなく暮らしておりました。或る夏の晩のことです。村の若い衆が寄つて、怖い話や、不思議な話で花を咲かせていました。」「どの話もありふれた怪談などで、これと言う耳新らしい話もなく皆退屈気味になりました。小太郎は隅の方で、皆の話を黙つて聞き入つてしまましたが、詰まらなくなりウトウトしていました。

その時です、誰かが小太郎に「おい 小太郎やおめえは、山へ行くのが仕事だべ、何か怖えー、ことに遭ったことはねーのか?狼におっかけられたとか?熊にでつかしたとか、おめえーはほんくらだから、何もねーだかよー。」小太郎は、仲間の言葉にカットなりました。何時も大人しくしている小太郎は、仲間の内で、小馬鹿にされときました。「皆の衆、わしはおめえらのようありふれた話など聞きたくねえ、もつと面白れえー、不思議な話があらー。」むきになつて小太郎は、あの天狗の恐ろしい言葉などをつかり忘れてしました。「ふーん、そりゃーどんなはなしだー。小太郎皆がどつと笑いました。「馬鹿こけえ、おらー、おらー、天狗を見たじやー」「小太郎は、「ああ!」と、云つて口をつぐんでしまいましたが、もう遅かつたのです。「天狗、そんな物なぞいるもんか?」若い衆はなおも小太郎をからかい続けました。「ほんとうじや、忘れもしねえ、二月の午の日、おらー雁ヶ腹摺山へ登つたんじゃー。」「小太郎は、夢でも見るようになつたん

を始めました。小太郎のうつとりした話し振りに引き込まれ皆はしいとなつて耳をかたむけておられます。小太郎はあるの不思議な天狗のお囃子になりました。皆の衆は、急に小太郎の姿が見えなくなりました。すぐに返るとビックリして辺りを捜して見ました。そこが話が終わると、我に返るとビックリして辺りを捜して見ました。すると、何処からか「助かるには、鶏百羽、酒百樽じや。」氣味の悪い声が聞こえてきました。それからは、この村では二月の午の日に雁ヶ腹摺山へ登る人はありませんでしたので、誰も不思議な天狗のお囃子を聞いた人はいませんでした。氏は当時、山岳雑誌に、この辺りの山々について山にまつわる伝説、奇談など数多く奇稿したり、山の紹介なぞした貴重な方です。その轟の一編から創作しました。

「わらべうた」について

大月市をふくめ郡内地においては、古くから大正時代にかけて、子どもたちの遊びの中に「わらべうた」が歌われてきた。現在の子どもは、昔の子どもとちがつて遊び方もちがない、又、遊びの時間も少なくなり、私達が子ども時代に歌った「わらべうた」が忘れさられやがては、亡べゆく運命をもつていると思う。

ここに老人たちから聞いたり、「いろいろな資料をもとにして、懐かしい「わらべうた」を記していく」と思う。「わらべうた」の種類は、活動的遊戯唄と静止的遊戯唄に分かれ、活動的遊戯唄は、子守唄、その他の遊戯唄に分かれ、静止的遊戯唄は、天文に関する唄、動物に関する唄、その他遊戯唄に分かれるので、この分類に従つて、記していくと思う。もし載つていない唄があつたら、どうぞお教えの程お願いします。

「わ、うたに、べりうた」

お囃子をしているように聞こえたのでしょうか。
夢のある嘶です。

伊勢・新潟・三河・信
州・神戸・武藏・名古
屋・函館・熊本・東京

伊勢

十九八七六五四三二一
でつつつつは番
東高野幡成村出雲た光め
京のの幡田の鎮の信の東一
本のの弘不守大倉宗五照宮
願法幡動様の濃宗五郎
寺宮様の善郎
寺



赤谷権現

参考文献
大月風土記
花咲山人夜記

井上文次郎

二月号へつづく